

タイ・カセサート大学研究協力拡充計画
第2段階（1986～1991年）に関する
技術協力要請書

昭和60年4月

国際協力事業団

122
807
ADL

農開畜

J R

85 --- 83

JICA LIBRARY



1050311[8]

タイ・カセサート大学研究協力拡充計画
第2段階（1986～1991年）に関する
技術協力要請書

昭和60年4月

国際協力事業団

国際協力事業団	
受入 月日 '85.10.14	122
	80.7
登録No. 12057	ADL

はじめに

タイ、カセサート大学研究協力計画は、昭和55年4月10日から昭和60年4月9日まで協力が行われ、成功裏に終了した。この間、タイ政府から、カセサート大学研究協力拡充計画（第2段階）の技術協力の要請が、昭和59年5月、及びさらに整理・統合された形で昭和60年4月に提出された。

本書は、昭和60年4月に提出された要請書「REQUEST FOR TECHNICAL ASSISTANCE ON STRENGTHENING RESEARCH ACTIVITIES IN KASETSART UNIVERSITY PHASE II (1986--1991)、TO THE GOVERNMENT OF JAPAN THROUGH JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY, APRIL 1985」を翻訳したものである。

これを契機に本プロジェクトが実現に近づくことを期待するとともに、今後我が国が技術協力の実施を検討するに当たっての参考資料として、広く関係者に活用されることを願う次第である。

国際協力事業団

農業開発協力部長

田 内 堯

目 次

はじめに	
I プロジェクトのタイトル	1
II 要 請 機 関	1
III 協 力 要 請 先	1
IV 要請の背景及びプロジェクトの妥当性	1
V プロジェクトの詳細	2
1. プロジェクトの目標	2
2. プロジェクトの目的	2
VI プロジェクトの研究課題	2
A 農業環境と品質管理技術	2
A 1 有毒残留物及び廃棄物の管理	2
A 2 農産物の収穫後の技術	2
B 作物改良のための生物工学	2
VII プロジェクトの研究課題の内容	2
A 農業環境と品質管理技術	2
1. A 1 有毒残留物及び廃棄物の管理	2
1.1 論理的根拠	2
1.2 活 動	2
1.3 研究担当ユニット	3
1.4 重要性及び利益	3
1.5 研究の作業計画	3
2. A 2 農産物の収穫後の技術	4
2.1 論理的根拠	4
2.2 活 動	4
2.3 研究担当ユニット	4
2.4 重要性及び利益	5
2.5 研究の作業計画	5
3. 要請する協力内容	5
3.1 日本人専門家	5
3.2 日本における技術研修	6
3.3 機 材	6
B 作物改良のための生物工学	6

1. 論理的根拠	6
2. 活 動	7
3. 研究担当ユニット	7
4. 重要性及び利益	7
5. 研究の作業計画	7
6. 要請する協力内容	9
6.1 日本人専門家	9
6.2 日本における技術研修	9
6.3 機 材	9
VIII プロジェクトの期間	9
IX 予算見積額	9
付属資料	10
タイ側の調査研究者及び協力者	10

タイ・カセサート大学研究協力拡充計画第2段階
(1986～1991年)に関する技術協力要請

1985年4月

研究プロジェクトの要請

- I プロジェクトのタイトル：カセサート大学研究協力拡充計画・第2段階
- II 要請機関：タイ国カセサート大学，バンコック
- III 協力要請先：日本国政府（コロポ計画に基づき国際協力事業団を通じて行われる協術協力）
- IV 要請の背景及びプロジェクトの妥当性

1978年，日本国政府はタイ国の農業開発に役立つ自然科学及び応用科学のさまざまな分野における研究活動を促進するために，ナコンパトム県のカセサート大学，カンベンセンキャンパスに総合研究センターを建設するため無償資金協力を行った。また1983年には新たな無償資金協力により必要な機材が設置された。1980年以降，国際協力事業団（JICA）は，日本人専門家による研究指導機材の供与，研修員の日本への受入れ及び研究助成金により技術協力を行ってきた。

タイ国側では，カセサート大学がその経常的運営管理の中で最善の努力を尽し，総合研究センターに研究員テクニシャン及び作業員の定員を配置し，また日本人専門家の活動に必要なその他の役務を提供してきた。我々は近い将来総合研究センターにおける新しいプロジェクト及び近代的設備を拡充し，タイ国の内外からより多くの研究者を招へいし，彼らがタイ国及び全人類のための技術開発のために総合研究センターを利用するようになることを望んでいる。

研究活動を促進し，供与機材をさらに有効利用するために総合研究センターはJICAからの技術協力をさらに必要としている。種々の機材は非常に精巧で複雑であるため，日本の専門家にその操作及び保守監理についての指導を仰ぐ必要がある。特に応用分野の拡大のためにはこれが必要である。総合研究センターの研究者及び技術者は新たに採用された人であり，日本又はタイにおいて日本人専門家による研修を受ける必要がある。総合研究センターは，他のいくつかのプロジェクト特にタイ国のニーズに直接関係のあるプロジェクトにも協力活動を行ってきたが，まだその程度は限られている。技術協力の第1段階（1980年から1985年までの5年間）においては研究範囲は種子生産技術と醸酵の分野に限られており，総合研究センターの2つのユニットに協力の重点がおかれた。今回の要請では技術協力の第2段階（1986～1991年の期間）において，センターの8つのユニットが完全に機能できるように促進され，総合研究センターの運営が農業の様々な分野における研究活動に役立つようになることを期待している。

すでに派遣された日本の専門家とタイ国の研究者とのこれまでの緊密な協力関係に鑑みて両国間の結びつきをより密接に，より強固にするためにそのような活動を継続できるものと我々は期待している。

V プロジェクトの詳細

1. プロジェクトの目標

プロジェクトの目標は、最適な農業生産を達成するために有効かつ適切な協力研究計画を開発し、確立することである。

2. プロジェクトの目的

- 2.1 農業研究開発を支える様々な分野の協力研究計画を実施し、カセサート大学のタイ人スタッフの研究能力を高めること。
- 2.2 1983年に特別無償資金協力により供与された機材の有効利用を促進すること。
- 2.3 農業汚染に関する問題を解決し新しい技術の誤用が環境に与える影響を最小限に抑えること。

VI プロジェクトの研究課題

次のA、B 2つの研究テーマが提案されている。AはさらにA1、A2の2つから成っている。

A 農業環境と品質管理技術

- A1 有毒残留物及び廃棄物の管理
- A2 農産物の収穫後の技術

B 作物改良のための生物工学

VII プロジェクトの研究課題の内容

A 農業環境と品質管理技術

1. A1 有毒残留物及び廃棄物の管理

1.1 論理的根拠

有毒残留物及び廃棄物による汚染は、タイ国の農業にとって重大な脅威となっており、公共の福祉に大きな悪影響を及ぼしている。この研究を提案した目的は、関係科学者を組織し、農業汚染のメカニズムを徹底的に調査し、近代的農業技術を農民に普及し、移転し、できうれば生産者と消費者の双方のために健全な環境を確保することである。

日本が農業汚染管理については世界のリーダーであることに鑑み、この研究は日本国政府からの援助を求めている。

1.2 活動

この計画の目標は、農業とそれに連鎖する社会の生活条件を改善するために、農業の有毒残留物及び廃棄物を監視するための有効な永続的システムを開発することである。

研究の目的

- 1.2.1 農産物及び畜産物の中の有毒残留物を制御するための各方法を適切に評価すること

と。

- 1.2.2 換金作物中のアフラトキシンの防除手段を検討すること。
- 1.2.3 土壌の微生物（土壌伝染性病原菌及び土壌昆虫を含む）に対する農薬の効果のアセスメント。
- 1.2.4 生鮮食料品中の農薬残留を制御する適当な方法を検討すること。
- 1.2.5 農業及び工業廃棄物特に厩肥作物残さアルコール醸溜工場及びでん粉工場からのスロップ廃棄物の利用及び処理を調査すること。
- 1.2.6 自然に起っている土壌の不良性並びに有毒残留物及び廃棄物によって生じる土壌の悪化に対処するための適当な技術を開発すること。

1.3 担当ユニット

研究活動は、総合研究センターの6つのユニットで行われ、これらのユニットの施設及び機器を使用することになる。

1. 植物害虫臨床・検疫ユニット
2. 環境科学ユニット
3. 中央生化学ユニット
4. 土壌・肥料試験・応用研究ユニット
5. 収穫後研究ユニット
6. ヘッド・ハウスユニット

1.4 重要性及び利益

研究成果は、農産物及び環境における有毒残留物問題を克服するための適切な技術を提供することになり、農業廃棄物の適正な管理法の決定に役立つこととなる。

1.5 研究の作業計画

研究活動は次のトピックについて行われる。

トピック 1. 家畜の組織及び畜産物の中の飼料添加物及び殺虫剤由来の残留物

- 1.1 飼料添加物（サルファ剤等）及び殺虫剤残留物の測定
- 1.2 実験用動物の慢性中毒の研究
- 1.3 品質管理法の確立と管理すべき物質の優先順位の提示

トピック 2. 換金作物におけるアフラトキシンの制御

- 2.1 換金作物中のアフラトキシンの測定のための迅速かつ有効な分析方法の確立
- 2.2 輸出農産物中のアフラトキシンのレベルを最低限に抑える方法の研究

トピック 3. 土壌中の残留農薬

- 3.1 残留農薬が土壌微生物及び土壌伝染性病原菌に及ぼす影響の研究
- 3.2 残留農薬が土壌昆虫に及ぼす影響の研究

トピック 4 生鮮食品の中の残留農薬

- 4.1 メクロン地域の生鮮食品の中の残留農薬の測定
- 4.2 生鮮食品の中の残留農薬を制御する方法の確立
- トピック 5. 農業及び工業廃棄物の利用及び処理
 - 5.1 農業廃棄物（厩肥、作物の残さ等）の利用及び処理の研究）
 - 5.2 工業廃棄物（アルコール醸造工場及びでん粉工場からのスロップ廃棄物等）の利用及び処理の研究

※

トピック 6. サバンナ気候における土壤悪化の監視

- 6.1 自然の土壤悪化が存在する問題地域の確定
- 6.2 メクロン盆地の熱帯サバンナ気候下における土壤悪化の度合の評価
- 6.3 農作物の十分な収量を達成するために土壤の悪化に対処する適当な技術の開発
（※研究はメクロン盆地を中心に行われるが、その成果は同じサバンナ気候下の他地域にも適用できると考えられる。）

2. A 2 農産物の収穫後技術

2.1 論理的根拠

作物や畜産物等の大部分の農産物は、程度の差こそあれ腐敗しやすいものである。特に、生産や育種にたずさわる科学者に比べてこの分野の研究を行う科学者がきわめて少ない開発途上国では、農産物の腐敗しやすい特質のために、多くの不必要な損失が生じている。タイ国では収穫後の処理、包装、輸送及び貯蔵の重要性が十分に認識されていないし、またそのための施設もない。また近代的技術もほとんど存在しない。このため相当量の農産物が失われており、おそらく外貨も失われているのであろう。

より良い収穫後技術で農産物を扱えば収穫後の損失が減少し、食糧供給量が増加することになる。また新鮮で質の良い農産物は大切に扱えば（例えば、最適な熟成段階において適切な取扱い法により収穫すれば）それらの価格も高くなる。このことは飢えた世界の食糧へ供給を増し、農民の生活水準を高め人々の食事の栄養価を高めることに役立つ。

2.2 活動

この研究の目標は、農産物の収穫後の量的及び質的損失に影響を及ぼす可能性のある要因について調査することである。次に、生産側から小売販売者そして最後に消費者に至るすべての段階における収穫後の損失を最小限に抑え、農産物の質を維持するために様々な技術改良を開発し、得られた情報はすべて社会に公表される。

2.3 研究担当ユニット

研究は、収穫後研究ユニット、植物害虫臨床・検疫ユニット及び中央生化学ユニットにおいて実施される。

2.4 重要性及び利益

研究完了後には、次のような利益が期待できる。

1. 農産物の収穫後の損失の評価
2. 特定の用途のための品質基準の確保
3. 収穫、処理、包装、輸送及び貯蔵技術の改善
4. 病害虫による損失を防ぐための収穫前及び収穫後の処理
5. 研究成果の普及
6. 農業関連産業の振興

2.5 研究の作業計画

農産物の収穫時及び収穫後の処理における諸問題を解決するために経済農産物研究が行われる。これには収穫後の生理学、昆虫学、病理学、包装、貯蔵、輸送及び小売段階での問題が含まれる。

1. 収穫後の損失の調査及び確認
2. 収穫後の輸送及び品質の維持に影響を及ぼす収穫後の要因の調査
3. 食卓用及び工業用農産物の収穫適期の研究
4. 質的及び量的損失の低減に重点を置いた収穫法の改善
5. 換金農産物の収穫後生理学及び貯蔵要件の研究
6. 収穫後の病害虫防除のための有効な処理の開発
7. 国内及び（又は）輸出市場に適したより良い取扱い及び包装技術の開発
8. 技術的ノウハウの公開

3. 要請する協力内容

3.1 日本人専門家

1. プロジェクトの全期間にわたって指導できるチーフとなる専門家 2 名
 - 1.1 毒物学者
 - 1.2 植物生化学者
2. 下記の分野の専門家 17 名（派遣期間 6 か月未満）
 - 2.1 有毒残留物の分析（2 名）
 - 2.2 家畜毒物学
 - 2.3 家畜病理学
 - 2.4 アフラトキシン分析
 - 2.5 植物病理学
 - 2.6 昆虫毒物学
 - 2.7 害虫の生物学的防除
 - 2.8 植物病害の生物学的防除
 - 2.9 環境科学

- 2.10 バイオガス生産
 - 2.11 微生物学的廃棄物処理
 - 2.12 収穫後生理学（2名）
 - 2.13 収穫後病理学
 - 2.14 収穫後昆虫学
 - 2.15 収穫後工学
- 3.2 日本における技術研修
- 1. 指導スタッフ3名の研修旅行
 - 2. 若手スタッフ17名の研修
 - 2.1 有毒残留部（2名）
 - 2.2 環境科学
 - 2.3 植物病理学
 - 2.4 害虫の生物学的駆除
 - 2.5 植物病害の生物学的防除
 - 2.6 家畜病理学
 - 2.7 家畜毒物学
 - 2.8 微生物学的廃棄物処理
 - 2.9 収穫後生理学（2名）
 - 2.10 収穫後病理学
 - 2.11 収穫後昆虫学
 - 2.12 収穫後工学（2名）
 - 2.13 土壌生態学
 - 2.14 土壌化学及び分析
- 3.3 機材

機材については調査チームと協議することとする。

B 作物改良のための生物工学

1. 論理的根拠

熱帯地方の農業国であるタイ国は、植物遺伝学資源の豊庫である。従来の育種方法による多くの経済的に重要な作物の品種改良が公共及び民間研究機関によって行われている。育種によって得られた優良品種は公共利用のために発表されてきた。このような従来の育種方法は一般に、育種の目標を達成するために長期間を要する。また、品種改良の過程で収量及びその他いくつかの農業生産上の特性に重点が置かれ、農産物の品質は無視される場合が多い。世界の農業市場における競争激化に伴い、種子の質、茎の質、病害虫に対する抵抗力及び栄養的な品質等作物の品質を高めることが重要となる。生物工学及び遺伝子工学は、市場及び

食品産業の要件を満たす望ましい特性をもつ新しい作物の品種の迅速な開発の機会を与えてくれる。このような高度技術，例えば組織培養，体細胞クローン及び配偶子クローン変異細胞融合及び遺伝子組換えは従来の品種改良のプロセスをスピードアップするための育種手段として利用することができる。

2. 活動

この研究での主な活動は，次の分野において植物遺伝子工学に関する研究を行う組織培養の研究態勢を確立することである。

- 2.1 植物の生殖質の開発及び改良
- 2.2 品種改良のための植物品種の遺伝学的操作
- 2.3 保証栽培植物の生産
- 2.4 雑種強勢の利用
- 2.5 研究員の研修

3. 研究担当ユニット

1. 中央生化学ユニット
2. 植物害虫臨床・検疫ユニット
3. 環境科学ユニット
4. 収穫後研究ユニット
5. 種子工学ユニット
6. ヘッドハウス及びメンテナンスユニット
7. 組織培養ユニット
8. 土壌・肥料試験・応用研究ユニット

4. 重要性及び利益

この研究は，さとうきび，スイート・コーン，トマト，きゅうり，パパイヤ及びラデンシユの収量及び品質を有効に高めるために植物遺伝子工学の最新技術を利用することを目的としている。研究完了後には，この分野について習熟した研究員と作物の優良品種が期待できる。

5. 研究の作業計画

研究と研修・普及の2つのカテゴリーに分類できる。

- 研究：1 プロジェクトにおいて使用される在来種の遺伝的純化
- 2 組織培養によるクローン繁殖
 - 3 体細胞クローン及び配偶子クローン変異の選定
 - 4 プロトプラスト融合

選定された作物の研究計画の概要(案)

作物	改良を要する特性	改良方法
1. さとうきび	(1) 無病作物の育成	(1) クローン繁殖
	(2) 病害虫に対する抵抗力	(2) プロトプラスト融合
	(3) 糖分含有量	(3) クローン選抜
	(4) 収量	
2. スイートコーン	(1) 園芸特性	(1) 体細胞クローン及び配偶子クローン変異
	(2) 病害虫に対する抵抗力	(2) 遺伝子組換え
	(3) 収量	(3) 遺伝子純化
		(4) 圃場での選抜
		(5) F ₁ , ハイブリッド
3. トマト	(1) 園芸特性	(1) 遺伝子純化
	(2) 病害虫に対する抵抗力	(2) クローン繁殖
	(3) 収量	(3) 人工種子
		(4) 体細胞クローン及び配偶子クローン変異
		(5) プロトプラスト融合
		(6) F ₁ , ハイブリッド
4. きゅうり	(1) 園芸特性	(1) 遺伝子純化
	(2) 病害虫に対する抵抗力	(2) クローン繁殖
	(3) 収量	(3) 人工種子
		(4) 体細胞クローン及び配偶子クローン変異
		(5) プロトプラスト融合
		(6) F ₁ , ハイブリッド
5. パパイア	(1) 園芸特性	(1) 遺伝子純化
	(2) 病害虫に対する抵抗力	(2) クローン繁殖
	(3) 収量	(3) 体細胞クローン及び配偶子クローン変異
		(4) プロトプラスト融合
		(5) F ₁ , ハイブリッド
6. ラデッシュ	(1) T/R比	(1) クローン繁殖
	(2) 病害虫に対する抵抗力	(2) 体細胞クローン及び配偶子クローン変異

- (3) プロトプラスト融合
- (4) F_1 , ハイブリッド
- (5) 人工種子

研修普及

セミナー及びワークショップは、関係専門家の相互交流及び研究活動の進展に応じて計画される。提案されている課題は人工種子技術プロトプラスト分離及び融合、DNAクローニング及び雑種強勢の利用である。

6. 要請する協力内容

6.1 日本人専門家

1. 専門家10名

- 1.1 植物の組織培養(2名)
- 1.2 分子生物学(1名)
- 1.3 植物遺伝子工業(2名)
- 1.4 植物生理学(1名)
- 1.5 植物育種(2名)
- 1.6 分子ウイルス学(1名)
- 1.7 昆虫に対する抵抗力(1名)

6.2 日本における技術研修

- 1. 指導研究者5名の研修旅行
- 2. 若手研究者10名の研修
 - 2.1 植物の組織培養(2名)
 - 2.2 細胞交配(2名)
 - 2.3 植物認証・検定(1名)
 - 2.4 DNAクローニング(2名)
 - 2.5 胚質の収集(1名)
 - 2.6 植物の育種(2名)

6.3 機材は調査チームによって選定される。

VIII プロジェクトの期間

1986年4月から1991年3月までの5年間

IX 予算見積額

総合研究センターの次の8つの研究ユニットによって活用される。

—植物害虫臨床・検疫ユニット

—収穫後研究ユニット

- 土壤・肥料試験応用研究ユニット
- 環境科学ユニット
- 中央生化学ユニット
- 組織培養ユニット
- 種子技術ユニット
- ヘッドハウス及びメンテナンスユニット

1. 日本側に要求される予算(1985～1989年)

機器及び資材 5億円
 専門家及び研修員 億円

2. カウンターパート(タイ側)

運営費 1億円

付 属 資 料

タイ側調査研究者及び協力者(案)

研究課題 A 農業環境及び品質管理技術, 責任者 Mr, Tongchai Kumpee, M.S. 微生物学

A 1 責任者 Mr. Vichai Korpraditskul Dr. SC. agr 植物病理学

A 2 責任者 Mr. Jingtair Siriphaniich, Ph.D. 収穫後生理学

研究スタッフ: 1. Miss Malinee Limpoka, Ph.D. 家畜毒物学

2. Mr. Narong Chungsamarnyart, Ph.D. 家畜解剖学(動物細胞の超微細構造)

3. Mr. Charoen Thongma D.V.M. 学位: 家畜病理学, 家畜毒物学

4. Mr. Worawich Wajjwalku D.V.M. 学位: 家畜病理学, B.S.c. 家畜病理学

5. Mr. Boonyarit Sayamphol, Dr, Agr. 昆虫伝染

6. Mr. Oub Santhoy, Ph.D. 昆虫生態学

7. Mr. Wiwat Suesard, Ph.D. 生物学的制御

8. Miss. Gaysorn Dhavises, Ph.D. 微生物学, メタン発酵

9. Mr. Niphone Thaweechai, Ph.D. 植物細菌学

10. Mrs. Napavarn Noparatnaraporn, M.S. 微生物学, 廃棄物利用

11. Miss. Pornsri Chairatanayuth, Ph.D. 動物栄養

12. Miss. Arunwan Boongorsrang, Dr. Eng. 微生物学, 廃棄物処理

13. Mr. Saichol Ketsa, Ph.D. 収穫後生理学

14. Mrs. Roongnapa Korpraditskul, M.S. 植物生態学, 環境科学

15. Mr. Permpong Sriprasertsakdi, M.S. 微生物学

16. Mr.Kanitta Sangkhaha, M.S. 植物病理学
17. Miss. Suratwadee Jiwajinda, B.S. 残留物分析
18. Miss. Sudawan Ujindha, M.S. 昆虫学
19. Mr.Bundit Jarimopas, D.Sc. 收穫後工学
20. Miss. Sirikul Wasec, M.S. 園芸学
21. Mrs. Teeranud Romphopak, M.S. 園芸学
22. Mr.Saichol Ketsa, Ph.D. 收穫後生理学
23. Mr.Bharata Kunjara, M.Eng. 收穫後工学
24. Mr.Neungpanich Sinchaisri, Ph.D. 收穫後昆虫学, 殺虫剤毒物学
25. Mr.Somsiri Sangchote, M.S. 收穫後病理学
26. Mr.Peeradej Tongumpai, M.S. 收穫後園芸学
27. Mr.Niphon Visarathanonda, M.S. 收穫後病理学
28. Mr. Irb Kheoruenromne, Ph.D. 土壤調査及び土地利用計画
29. Mr. Visoot Verasarn, Ph.D. 土壤物理学
30. Miss.Anehalee Suddhiprakan, Ph.D. 土壤鉍物学
31. Mr.Suradej Jintaganout, M.S. 土壤の肥沃度と植物栄養
32. Miss. Arunsiri Kumlung. M.S 土壤の肥沃度と土壤分析
33. Miss. Patcharaporn Kairusmee, B.Sc. 土壤分析
34. Mrs. Nantana Chuen-im, M.S. 土壤物理学
35. Mr. Chanvit Vajrabukka, Ph.D. 動物環境生理学
36. Mr. Chainarong Kuntapanit. Ph.D. 肉製品

研究課題 B 作物改良のための生物工学

責任者：Mr. Sutat Sriwatanapongse, Ph.D. 植物育種

研究スタッフ

- 育種計画：1. Mr.Anothai Choomsai, Ph.D. 責任者, 植物細胞遺伝学
2. Mr. Kasem Piluek, Ph.D. 園芸学
 3. Mrs. Sutawee Suprakarn, Ph.D. 園芸学
 4. Mr. Chairiek Saguansupayakorn, Ph.D. 園芸学
 5. Miss. Chaunpit Aroonrungsikul, M.S. 植物科学
 6. Mr. Pornpun Pooprompan B.Sc. 植物科学

組織培養計画：

1. Mr. Kruik Naritoom, B.S. 責任者, 生物学
2. Mrs. Tipvadee Affatham, Ph.D. 昆虫細胞培養
3. Mrs. Yoopa Monklasook, M.S. 組織培養

4. Miss. Patana Srifa, M.S. 植物病理学
5. Miss. Sudawan Yoochinda, M.S. 昆虫学
6. Miss. Prapaporn Tangkitchote, M.S. 園芸学

植物遺伝子工学計画：

1. Mr. Thira Sutabutra, Ph.D. 責任者, 植物ウイルス学
2. Mr. Supat Attathom, Ph.D. 植物ウイルス学
3. Mr. Niphon Thaweechai, Ph.D. 植物細菌学及び遺伝子工学
4. Mr. Wichai Kositratana, Ph.D. 分子生物学及び遺伝子工学
5. Miss. Pissawan Poolpol, Ph.D. 電子顕微鏡検査及びウイルス学
6. Miss. Sukuntarot Pootongkam, B.Sc. 植物科学

作物生産生理学計画：

1. Mr. Kasem Sooksatan, Ph.D. 責任者, 植物科学
2. Mr. Udom Poolkate, M.S. 植物科学
3. Mr. Vichai Korpraditskul, Dr. Se. agr. 植物病理学
4. Miss. Panee Thiraporn, Dip. Agr. Ing. 種子生理学
5. Mr. Boonyarit Sayampol, Dr. Agr. 昆虫学
6. Mr. Saridiporn Chooprayoon, M.S. 植物病理学

JICA